

## 献呈の辞

「年年歳歳花相似 歳歳年年人不同」（年年歳歳、花は相似たり、歳歳年年、人は同じからず）と詠んだのは唐の詩人でした。毎年の自然は変わることなく続くのに、それを愛でる人たちは同じではない、というような意味だと思われまふ。大学という組織に所属しておりますと、同じような感慨にとらわれまふ。例年通りにカリキュラムは進行していくのに、それを聴講する学生たちは毎年異なっております。そして長年一緒に働いた同僚もまた去っていきまふ。

人間科学部が発足して10年が経ちました。そして専修大学は創立140周年を迎えます。そんな折に川上周三教授と今野裕昭教授が今年3月をもって定年でご退職されることになりました。同僚として同じ職場に働くことができ、両先生の研究や教育のスタイルを身近に接することができましたことを大変光榮に思いまふ。以下両先生の略歴をご紹介しますとともに、個人的な思い出を記させていただきます。

川上周三教授は、関西学院大学社会学部をご卒業後、名古屋大学大学院文学研究科で修士課程を終了されました。博士課程在籍中に鹿児島大学教養部に職を得られました。鹿児島大学にはおよそ20年間お勤めになり、1999年に専修大学文学部に教授として就任されました。以後、新学部設置とともに人間科学部に移籍され現在に至っております。川上先生のご著書は多く、ヴェーバー研究を中心に6冊の単著があり、その他数多くの共著・共編著・学術論文を執筆してこられました。詳しくは「川上周三教授 履歴・業績」をご覧ください。

川上先生はとても柔和なお人柄で、ゼミでは多くの学生から慕われていました。親しみを込めて「周ちゃん」と呼ばれることを厭うようすもなく、いつもニコニコと笑っておられる姿が印象的でした。

今野裕昭教授は、東北大学教育学部をご卒業後、同大学大学院で修士課程、博士課程に進まれました。途中博士課程を休学しハワイ大学で修士課程を修了されています。その後東北大学の助手を皮切りに、秋田大学、宇都宮大学で講師、助教授、教授を務められました。こうした教務の傍らで2001年には筑波大学より社会学博士号を授与されました。ご著書、論文は数多く、博士論文をまとめられた『インナーシティのコミュニティ形成』をはじめとして数多くの出版物、学術論文を執筆されてきました。専修大学には2004年に文学部に教授として着任され、2010年の人間科学部の設置とともに移籍され、現在に至っております。

今野先生のお人柄を一言で表すならば、「篤実」という一語に尽きるような気がしまふ。必要な仕事はいつもきちんと遂行されました。本学に移動後数年を経ずして新学部設置の話が持ち上がり、そのために教員は奔走しなければならなりましたが、前任校での経験を活かして確実に実務をこなしていかれ、新学部の礎を築きました。もっとも強く私の印象に残っているのは、大学センター入試の実施本部担当責任者として重責を果たされたことのことです。今野先生は人前で目立つことを決して好む方ではないのですが、この時ばかりは本部責任者として多くの教職員を指示してセンター入試の実施を取りまとめられました。その後一年間の国内研究員期間を挟んですぐに社会学科長をお願いすることになりました。このような激烈な職務が心身に大きな負荷をかけたのではないかと危惧しております。

人間科学部社会学科の創設に携われ、10年間にわたって社会学科をリードしてくださった両先生が今年度をもって教壇を去られることはわれわれに教員にとっても、教えを頂いてきた学生・卒業生にとっても大きな痛手です。しかし両先生が社会学科に残していられる社会学的発想の精神を土台にして、社会学科が今後発展していくよう努力することをお約束して、『専修人間科学論集社会学篇』川上周三教授・今野裕昭教授退職記念号への献呈の辞とさせていただきます。

令和2年3月

人間科学部長 嶋 根 克 己